

『復活の主からの言葉』ヨハネ20:19-23

20:19 その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。

20:20 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。

20:21 イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。

20:22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。

20:23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。

●序論

先週まで「イエスさまがよみがえられた」ことの報告が、弟子たちの耳に届けられたところまで読んできました。

イエスさまの十字架と葬りから三日目の早朝、その墓に向かってみると、墓をふさぐ石は取り除けられ、そこにあるはずの遺体がなくなっている。

マグダラのマリヤから、そのことを聞いたペテロとヨハネは、その墓に行きその空の墓を確認て、そこを後にした。そのあとマリヤは、復活のイエスさまと出会い、再び弟子たちのもとに来てそのことを告げに来た。そのマリヤのありさまは、数時間前の彼女ではなかったことも、ヨハネは見、印象深く記しています。

:18 マグダラのマリヤは弟子たちのところに行って、自分が主に会ったこと、またイエスがこれこれのことを自分に仰せになったことを、報告した。

それが、ヨハネが見聞きしたありのままの出来事であり、それでもヨハネを含め弟子たちは、戸を閉ざして隠れていた…、今日はそのところから始まっているのです。

●本論

I. 丁寧な取り扱いがあった

先週、「からの墓」の前でずっと泣き暮れていたマリヤの姿を見ました。

み使いが語りかけても、復活のイエスさまに問いかけられても、それとわからなかった彼女の心。その心は、死んだイエスさまの遺体を失った悲しみを抱きしめていたありさまでした。

今日、弟子たちは自分たちのいるところの戸を閉ざして息をひそめていました。

マリヤと比べて、泣き散らして取り乱すわけではない。落ち着いていて立派でしょう？とは言っていないのです。 彼らの心もまた、もっとこわばっていたのです。

彼らの中にはからの墓を見に行ったペテロもヨハネもいる。けれども、彼らは戸を閉ざし続けていたのです。

彼らが、ユダヤ人たちを、「恐れていた」からです。

自分たちも、イエスさまにつながる者としてとらえられるのかも。それらの恐れが、「イエスさまの復活を想う」思いよりも圧倒的だったのでしょうか。

イエスさまは、突然そんな彼らの真ん中に立ち、そして語りかけてくださったのです。

:19（新共同訳） その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

さらに、丁寧にも…

:20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。

ここでやっと、弟子たちの心に喜びがおとずれたことがわかります。素直に喜ぶことができたありさまを知ることができます。

「恐れによって、心がこわばる経験」。それはヨハネがこの福音書を書き綴っていた時代の信仰者たちが経験していたものでもありました。

そんな人々にとって大切だったのは、同じ経験をして、癒され、解放された、使徒たちの体験であり、証しであり、また自分たちもまた、主の御声を経験することでした。

この福音書は、包み隠さず正直に、自分たちの歩みと経験を語ります。

彼らは、その一回の経験で、力強く立ち上がることができたか…と言うとそうではないのです。それは福音書記者ヨハネの経験でもありました。

そんな彼らに、イエスさまは何度もご自身をあらわしてくださった。それほど丁寧なお取り扱いであったのです。

Ⅱ. 平和の呼びかけがあった

:19（新共同訳）…そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」（シャローム）と言われた。

シャロームという言葉が指し示す「平和」への願い・・・

一言で言うと、「癒しと回復」です。つまり本来ならこうあるべきという完全な状態に回復されることだと申し上げた。

つまり、それは、心身の健康、自分とそして人との良い関係、何よりもまず、神との関係が完全に保たれている状態を願う、包括的で深い祈りの言葉でした。

すべてが本来あるべき姿で、満たされているという理想的な状態を指すのですと。人は、神に背を向け、その罪によってその「平安」シャロームを手放してしまいました。

あの弟子たちは、イエスさまから目を背け、復活のニュースよりも、この世の恐れに心を奪われて、心がこわばっていたのです。もはや自力でも、時間をかけても、取り戻すことができない不安と恐れにとらえられていたのです。

そんな彼らに「シャローム」と呼びかけられた。その時にも引用したイエスさまが十字架の前夜に語られた言葉があります。

14:27 わたしは平安（平和・シャローム）をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。

弟子たちも、そしてわたしたちは失敗します。また時には過ちを犯すこともあります。でも、だからダメだ、あなたはおしまいだ…と、イエスさまは言わないのです。「シャローム」平和（平安）があるように、と語ってくださるのです。

さらに、その平和は「世が与えるようなものとは違うのだ！」と語ってくださるのです。

その平和は、キリストをもくださり、その十字架上でのいのちの犠牲払うほどに愛して下さる神様の愛に満たされているのです。

Ⅲ. 使命のことばがあった

イエスさまが下さる平和は、彼らが自分の居場所で、戸を閉じて留まり、平穏に過ごすためのものではありませんでした。

20:21 イエスはまた彼らに言われた、「安かれ（平安があなたがたにあるように）。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。

「父がわたしをおつかわしになったように」。

イエスさまは、人を愛し、救うために、遣わされてきたお方です。

そのようにわたしたちも、この世に遣わすというのです。

そのために、力と権威を与えてくださったと言います。

:22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。

息を吹きかける。それは霊の息吹をもって人を造った、あの創造物語に通じます。

創世記2:7 主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。

自分の能力や経験、自信に由来するものではない、神の息吹（霊）によって新しく生かされている者として、わたしたちはキリストの赦しの福音を携えて出ていくのです。

:23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。

わたしたちは聖霊を受けて、圧倒的な裁き主になるのでもありません。

わたしたちは、聖霊により新しくされて、キリストがいのちをもって罪の赦しを成し遂げてくださった福音を携えて、人々をその恵みへと招待するのです。

さいごに)

このあと弟子たちは、すぐに立ち上がることができたわけではありません。

まだ、その居場所にとどっていました。そこにまたイエスさまが現れて、次週見る疑い深いトマスに語りかける。そのあと、そこを離れて漁をしていたら、そこにイエスさまは現れて、今度はペテロに語りかける。そしてパウロの証言によると、500人以上の弟子たちに、ご自身をあらわされたとあります。(cf: 1コリント 15:6)

さらに、天にあげられる際には、彼らに命じました。

使徒1:4 そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。

そうしてあのペンテコステの体験をもって、彼らは立ち上がって大胆にイエス・キリストを証しし、伝えるようにされていくのです。

乱暴な言い方をしますが、イエスさまが十字架でわたしたちの罪を背負って死んでくださった。イエスさまが三日目によみがえられた。

そういう出来事で、終わっていないのです。

イエスさまは弟子たちを心から愛し、その弱さや足りなさ、また不理解や頑固さにも、時間をかけて、順々に、丁寧に、出会いを重ねて、彼らを信じる者、信じて生きる者。そしてその福音を伝えていく者へと変えてくださったのです。

とても丁寧なお取り扱いです。それがイエスさまのアプローチなのです。

まさに何度もお読みしたこの言葉の通りです。

13:1 過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

今はどうなのでしょう。

14:16 わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。

そしてこう約束されています。この約束を心にしっかり覚えましょう。

… 14:18 わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。